

特41

844

弓術獨稽古
初編

075174-000-2

特41-844

弓術獨稽古 初編

乾 健一郎/著

M26

CEM-0075



弓術獨學辨言



孝。敬神尚武。而不

制強。是我神國之秀氣

也。故儒生文人。色莊觀美。汲々

於術利者。不及於武人農夫真

率淳厚益于世矣。而弓射為技

也。蓋強弱隨力。生殺如意。且達

于遠遐。天下治則可以講禮儀



資衛生矣。故赤縣聖賢亦貴之。禮記曰。射者。進退周還。必中禮。內志正。外體直。然後持弓矢審固。持弓矢審固。然後可以言中。此可以觀德行矣。鄒賢曰。仁者如射。射者正己而後發。發而不中。怨勝己者。反求諸己而已矣。可以觀焉。抑赤縣及歐米人。

蓋不能挽強弩。而唯本朝人士能之。故赤縣人指東方曰夷。蓋非賤之。稱能挽大弓也。由是觀之。弓射者。本朝之卓藝也。故自古稱武曰弓箭。射豈可忽哉。蓋舊對州藩弓射師。竹窓。乾健一。郎氏。夙精於日置流射技也。而間不偏其流派。折衷諸美。述弓

術獨學者。因吾舊知己福田放
虎氏。需辨言於余。余問福田氏
曰。柳川雲龍者。通國力士也。而
對於弱。則哂推之耳矣。不敢踏
焉。荒木又右衛門天下劍客也。
辱于人奴。而不敢怒焉。謹避之
耳矣。夫抗於弱。而憤爭疾視。打
且蹴者。懦夫之狂也。余雖未學

射儀。乾氏。心術果在何也。福田
氏曰。吾乾氏。雖其射百發百中
也。有時不必中。唯恐傷的矣。
余曰。然則道德經。所謂神武不
殺者歟。乃辨之時。明治二十五
年。第十一月。新嘗祭日。

鶴湊

山本晴茂



凡例

一弓術ハ我國武藝ノ中最モ銳利ノ術ニシテ
古來武人ノ必ズ學バザル可カラザルモノ
ナレバ其派ノ如キモ數流ニ分レ從テ各派
ノ著書モ多ク一朝其蘊奧ヲ究ムルヲ能ハ
ザルモノナレバ本書ハ唯ダ一派ニ偏セズ
諸派流ノ中長ヲ採リ短ヲ去リ專ラ初學ノ
徒ヲシテ一讀其秘訣ヲ會得セシムルヲ目
的トシテ編著スルモノナレバ語句文章ノ
卑陋ナル固ヨリ免ル、丁能ハザルモノナ
ルヲ以テ希クハ讀者幸ニ文章ノ拙劣ヲ咎

メズ其意ノ有ル處ヲ會得セラレンコトヲ
一本會ハ初學ノ徒師ニ據ラズシテ弓術獨習
ノ便ヲ圖リ編著シ只ダ其大要ヲ記載スル
ニ止マルモノナレバ其本編ニ漏レタル蘊
奧秘訣ノ如キハ後編ヲ俟テ出版スベシ
一本書ハ勿卒編著スルモノナレバ固ヨリ誤
謬ナキヲ保セス讀者幸ニ高恕ヲ玉ハゞ幸
甚

編者識

目次

- 第一條 足踏ミノ事
- 第二條 胴作りノ事
- 第三條 弓構ヘノ事
- 第四條 打テ起シノ事
- 第五條 引込ミノ事
- 第六條 見込ミノ事
- 第七條 押手ノ事
- 第八條 引手ノ事
- 第九條 引手臂下ル癖ヲ矯正スル事
- 第十條 引手臂上ル癖ヲ矯正スル事

第十一條 引手延ビノ事

第十二條 引手カラ入レ所ノ事

第十三條 押手引手ノカラチ平均ナラシムル事

ル事

第十四條 引手撮ミ様ノ事

第十五條 左右肩根並肩心持ノ事

第十六條 腰ノ詰ト云フ事

第十七條 骨合筋道ノ事

第十八條 矢束ノ事

第十九條 放レノ事

第二十條 息合ノ事

第廿一條 氣合ノ事

第廿二條 初學ノ人稽古心得ノ事

第廿三條 卷藁稽古心得ノ事

第廿四條 的稽古心得ノ事

第廿五條 弓強弱ノ事

第廿六條 矢ノ事

第廿七條 鞞ノ事

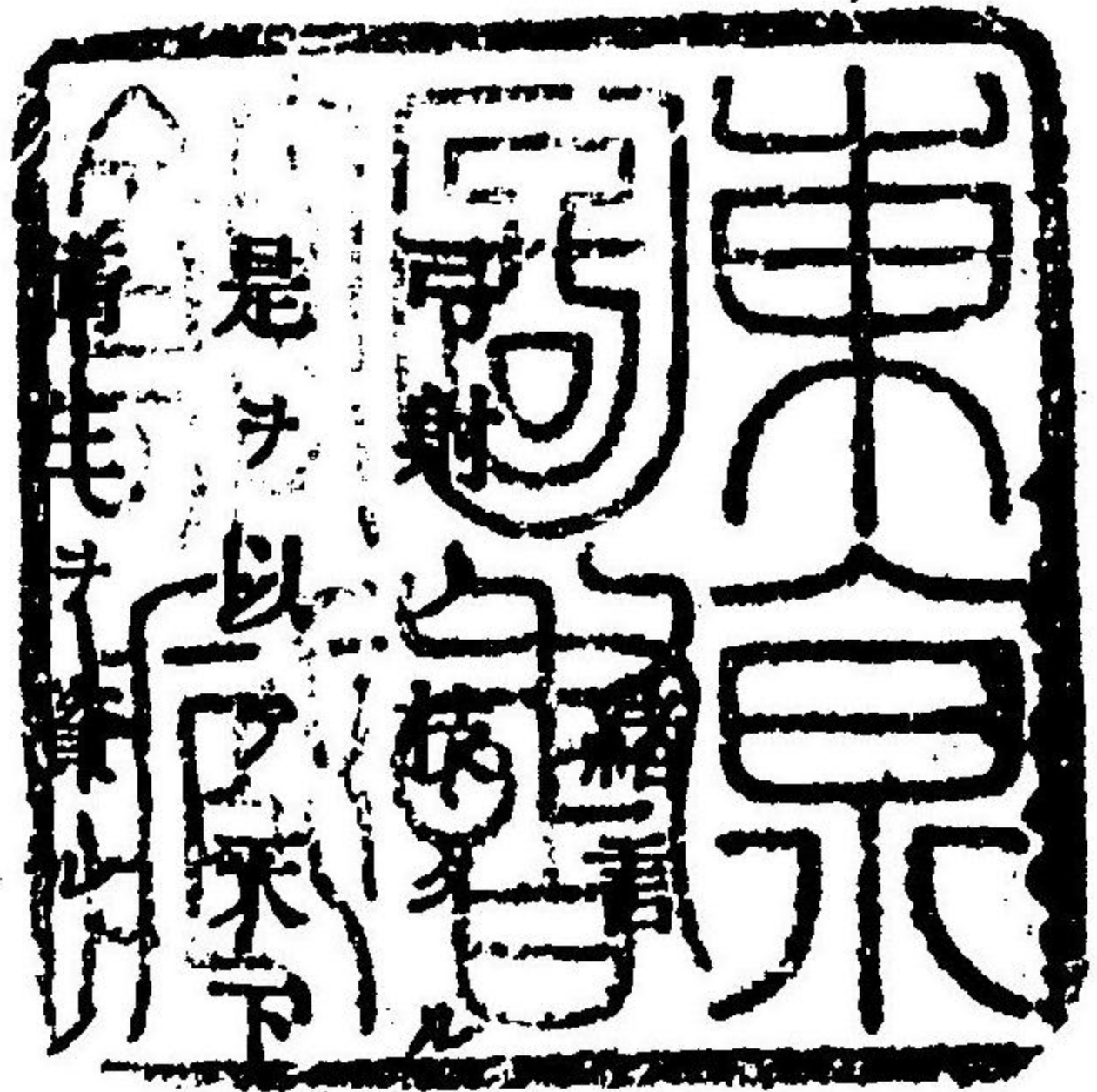
第廿八條 禮射ノ事

第廿九條 武射ノ事

第三十條 弓名稱ヲ知ラシムル事

第卅一條 矢名稱ヲ知ラシムル事

弓術獨稽古



對州

乾 健一 郎 著 述

ヤ内心ヲ正フシ外體ヲ直フス
 治マレバ則チ以テ禮儀ヲ講シ
 器ト爲スベク天下亂レバ則チ
 以テ敵ヲ挫キ國ヲ護ルノ具ト爲スベシ然ラ
 バ則チ此技タル士氣ヲ鼓舞シ武ヲ尙ヒ活潑
 ノ氣ヲ養ヒ膽ヲ鍊ルニ足ル古來東西各國ノ
 人恃ンデ以テ銳利ノ器トスル所ノモノ皆弓

箭ニ由ラザルハナシ吾國ノ如キ神武以來明
君忠士ノ國ヲ治メ民ヲ撫ヅル皆弓箭ノ力ニ
由ル嗚呼弓箭ノ世ニ用ヒラル、ヤ久シ其効
アルヤ偉ナリ方今文運日ニ進ミ人智月ニ開
ケ社會萬般ノ事物一トシテ改良進步セザル
ハナシ就中兵制ノ如キハ一新面目ヲ改メ又
舊來ノ態ヲ存セズ是ニ於テカ昔恃ンテ以テ
銳利ノ器トスル所ノ者今日迂トシテ又願ミ
ザルニ至ル銃ノ一發能ク敵ヲ斃シ砲ノ一擊
能ク鐵艦ヲ破ル世人皆其効ノ著大ナルニ驚
カザルハナシ然レドモ志氣ヲ養ヒ武ヲ尙ヒ

愛國ノ元氣護民ノ要素タルモノ果シテ何レ
ヨリ發起スルヤ之ヲ講スルモノ少ナシ予ヤ
之ヲ憂フル久シ弓射ノ如キハ開明ノ今日無
用ノ長物ニ屬スルガ如シト雖モ亦之ヲ學ハ
バ或ハ得ル所ナキニ非ズ頃口世間弓箭ヲ弄
ブ者アリ就テ之ヲ觀レバ規律ナク法則ナク
動靜定マラズ射形整ハラズ只ダ的中ヲ以テ
目的トシ攝生ノ爲メニスルニアラザレバ玩
弄ノ樂ミニ過ギズ眞ニ射ヲ學ブ者ニ至テハ
鮮ナシ是ノ如キハ益々弓射ヲシテ徒技ニ屬
セシムルノミ安ソ愛國ノ元氣護民ノ要素

ヲ喚起セシムルヲ得ン予幼ヨリ射術ヲ學ビ
少シク得ル所アリ遇々予ニ就テ射技ヲ問フ
者アリ然レドモ弓射ノ如キ其派流數派ニ分
レ一々之ヲ説明教授スル能ハズ依テ本書ヲ
著ハシテ以テ口述ノ勞ニ易ユ本書ハ專ラ簡
易ヲ旨トシ一派ニ偏セズ一流ニ泥マズ長ヲ
採リ短ヲ去リ骨ヲ擧ゲ髓ヲ拔キ其順序ト法
則トヲ明示シ初學ノ人ヲシテ一讀其意ヲ得
ルニ易カラシム庶幾クハ讀者弓術ヲ以テ娛
樂ニ供セス玩具ト爲サズ愛國護民ノ元氣ヲ
喚起養成スルノ目的ヲ以テ之ヲ學バゞ又以

テ神州ノ民ニ愧ザザルベシ

第一條

足踏

足踏是ヲ正直〔左足ヲ直トシト云フ即テ的ヨリ射場迄線ヲ引キ其線ノ上ニ左足ヲ踏ミ定メ右足ヲ夫レニ應シテ八文字形ニ踏ム可シ而シテ足踏ノ廣サハ我が矢束ノ長サヲ以テ定寸トス兩足共ニ足ノ裏ヲ土ニ踏付ケ膝頭ヲ左右トモ内ニ折込ム様ニシテ力ヲ入ル可シ而シテ發射ノ際ニ當リ越矢多キトキハ兩足ヲ定寸ヨリ少レク狹ク又落矢多キトキハ廣ク

踏ム可シ此則ナ射ヲ行フノ根源ナリ

但貫キ物、遠矢、繰矢、防矢、ナド稱レ種々秘法アレドモ當今ニ必用ナキヲ以テ之ヲ省略ス

第二條

胴作り

胴作りハ胴ヲ柱ト極メ能ク据ヘ込ミテ動カザルヲ宜シトス胴ニ五ツアリ懸カルト云ヒ退クト云ヒ照ルト云ヒ伏スト云ヒ中ト云フ而シテ古傳ニ二ツ胴ト稱シ直ナルヲ「マサメ」ト云ヒ曲ナルヲ板目ト云フコトアレドモ予

ハ中ノ教ヲ採ルモノニシテ此法ハ膈ノ据ヘ様ヲ以テ肝要トス最モ注意スベキハ臍下ニシテ之ヲ満月ノ如ク張ル可シ然レドモ社ハ心氣ノ逆上シ易キヲ以テ成ル可ク氣ノ逆上ヲ防グ様注意セザレバ放射ノ場合ニ至リ呼吸必迫レ爲メニ射形悪シクナルモノナリ

注意

臍下ノ張り様ハ腹ノ内ヨリ充分ニ張ル可カラズ只ダ腹ノ上皮ヲ膨ル様心得ユベレ内ヨリ張ルトキハ心氣必迫シテ一ノ凝癖ヲ生シ惡シキナレバ能々鍛鍊工夫ス可シ

第三條

弓構へ

弓構へニハ前後、中ノ三段アレドモ今中ノ教ヲ
 ナ以テ云へバ左手ニテ弓ノ握皮ノ處ヲ握リ
 右手ニ矢二本ヲ持テ先ツ早矢ヲ播ヒ乙矢ヲ
 中指〔俗ニ丈ヶ高ト云フ〕ト無名指〔俗ニ紅指ト云フ〕トノ間ニ逆
 サマニ挾ミ弓ノ元彌ヲ膝頭ニ置キ右手ヲ臍
 下ニ當テ、心氣ヲ静メ意氣適合ノトキ右手
 ニテ逆サマニ挾ミタル乙矢ノ根ノ處ヲ引出
 シ子指ニ挾ミ元彌ノ處ヲ膝頭ヨリ少シク上
 へ取り上げ弦口ツツヲ曲尺凡ソ一尺四寸計リ明

ケ左方へ引廻シ矢ノ根的ノ眞下ニ至ルトキ
 乃テ押手引手菱形ニナル様注意スベシ古傳
 ニ目付ケノ節ヲ以テ的ヲ割ルト云フコトアリ
 リ委レクハ下ノ條ニ説明スベシ

第四條

打テ起シ

打テ起シ前ニ謂フ所ノ如ク押手引手ヲ菱形
 ト爲シ矢ノ根的ノ下ニ至ルトキ押手ヲ低ク
 引手ヲ高ク舉ゲ〔此時心氣ハ逆〕耳ノ上ヨリ廣大ニ
 引ク可シ弓構へ打テ起シニテ臂成リ押手引
 手ノ懸ケ様及ヒ力ノ入レ所ニテ其射ノ良否

定マルモノナルヲ以テ能ク注意スベキ處ト
ス

注意

押手ノ肩ハ少シ落レ内ニ入ル様引手ノ肩
ハ少シ前へ張り出ス様心得ユベシ

第五條

引込ミ

引込ミニハ種々ノ教アレドモ長橋ノ引込ミ
ヲ以テ宜シトス此法ハ押手引手一様ニ折合
フ様充分廣大ニ引ク可レ而レテ間々技藝ニ
縮癖ノ出ルコトアルヲ以テ成ルベク廣大ニ

延張スルヲ宜シトス而シテ左右ノ肩根ハ則

チ橋ノ地形ニ比スルモノナレバ地形トハ橋ノ左

右ノ形也丈夫ナラザル可カラズ左右トモニ縮

ミノ出ヌ様注意スベシ

又引込ミチ虹形トモ反リ橋トモ云フコトハ

只メ丸ク引合ハスルヲ云フモノニテ左右相

詰マルトキハ中リニ害アルニ依リ初學ノ者

ハ左右トモ充分技ノ延ビル様注意スベシ

第六條

見込ミ

見込ミハ前打チ起シノ條ニ述ル如ク口ナ

明ケルトキノ目付ケテ最モ肝要トスルモノ
ニテ先ヅ矢ノ蟻^{アリ}ノ處ヲ見之ヲ引廻スニ從
ヒ次第ニ矢筈ヨリ筥^コヲ見送り押手引手ヲ菱
形ト爲シ矢ノ根的ノ眞下ニ至リタルトキ矢
ノ根マデ見送り而シテ根ヨリ眼ヲ外シ的ヲ
見込ミ其儘照ルトモナク伏ストモナク左右
へ片寄ル事モナキ様注意ス可シ
打テ起レタル際ハ的ヲ見詰ム可カラズ的ヲ
見詰ムルトキハ精心ヲ之ニ奪ハレ爲メニ射
形惡シク成リ又從ツテ中リニ關係スルモノ
ユエ眼ハ宜シク廣ク一體ヲ照ラシ臍下ニテ

的ヲ見タル心得ヲ第一トス
見込ミ照ルトキハ矢下ク伏ストキハ矢上ス
矢前へ往クトキハ面ヲ少シ後^{ウラ}へ廻シ後へ往
クトキハ前へ廻ス可シ
左右折合ヒタルトキ弓餘リ直立スルトキハ
矢總テ前へ付クヲ以テ弓ハ折合ヒタルトキ
少シ前へ伏スヲ宜シトス然スルトキハ事ト
體ト放レズシテ合體スルニ依リ矢勢モ宜シ
キモノナリ

第七條

押手

押手〔弓手ト〕弓構へシテ打テ起シタル際ハ押手
ノ拳コブヲ少シク前ニ曲ゲ左右へ引分ケルニ從
ヒ中指ト無名指トニ力ヲ入ルベシ拇指ノ根
ヲ以テ弓ヲ向ムカフへ押シ次第ニ引分ケルニ從ヒ
弓ヲ捻ル様心得ユベシ
譬へバ押手拇指ノ根ヨリ肩根マテ線ヲ畫キ
其線ノ所へ力ヲ入ル、ヲ肝要トス然スレバ
上筋〔ウラナ左川〕ニ勢力ノ籠ルモノナリ
上段押手握リ方ハ中指ト無名指トノ二本ニ
力ヲ入レ子指ニハ力ヲ入ル可カラズ子指ニ
力ヲ入ル、トキハ放レ從テ悪レク成ルモノ

ナリ

弓ノ握リ皮ト手ノ腹トノ間ニハ少シク空隙
ヲ存スベシ如何トナレバ隙マタナキトキハ押手
ノ働キ自由ナラザルノミナラズ爲メニ引手
モ悪シクナリ從テ中リニ害アルモノナルヲ
以テ精々注意スベシ假令バ其握リ皮ト手ノ
腹トノ間ニ鶏卵ヲ入レタル如クシ強ク押ス
トキハ之ヲ破ルノ恐レアルヲ以テ之ヲ破ラ
ザル様注意スルト同シキ心得ヲ第一トス而
シテ餘リ押手ヲ延スシ過スコト勿レ延シ過グ
ルトキハ押手ハ全ク死物トナルモノナルヲ

以テ能々工夫鍛錬ス可シ此ヲ上段ノ押手ト云フ

中段ノ押手握リ様ハ上段ニ同ジト雖モ此ハ脈坪ノ所ヨリ肩胛關節前部マデ[〓]線ヲ畫キ其線部ニ力ヲ入レ而シテ押手引手折合ヒタル際弓ヲ向フヘ押シ捻ル力ハ上段ヨリ少シ減スベシ只ダ上段ト中段トノ異ナル所ハ上線ト中線トニ力ヲ入ル、ノ別アルノミ此ヲ中段ノ押手ト謂フ

下段ノ押手トハ上段ト全ク反對ニシテ此モ拇指ニテ弓ヲ向フヘ押シ捻ル力ハ中段ヨリ

少シク減シ專ラ子指無名指ニ力ヲ入レ子指ノ下ヨリ一直線ニ腋窩下ノ中部ニ至ルマデ[〓]線ヲ畫キ其線ニ力ヲ入ルベシ此ヲ下段ノ押手ト謂フ

以上三段ニ教ヲ分ツト雖モ成ル可ク上段ニ據ルヲ宜シトス然レドモ人々ノ筋骨同一ナラザルヲ以テ如何ニ上段ノ押手ニ據ルトモ或ハ上段ニ成ラザルコトアリ然ルトキハ止テ得ズ中段或ハ下段ノ押手ニ據ル可レ而シテ人各天賦ノ得生アリ因テ其筋骨ニ逆ラハザル様注意セザレバ百發千射ノ效ヲ積ムト

雖モ其蘊奧ヲ得ルコト難シ
人各押手ノ宜シキ者アリ又ハ引手、體、氣合ヒ
熟レカ採ル可キ處ノモノアルヲ以テ其宜シ
キ處ヲ培養シ惡シキ處ハ射ヲ學ブ者ヘ知ラ
セズ自然ト矯正スルヲ肝要トス惡シキ處ヲ
知ラスルトキハ直クニ其惡シキ處ニ氣ヲ奪
ハレ爲メニ體中ニ一ノ凝癖ヲ生スルヲ以テ
其害反テ大ナリトス故ニ師タル者ハ能々注
意教導ス可シ

第八條

引手

引手（引手トモ云フ）是亦押手ノ條ニ述ベタル如ク
人々天賦ノ體格、筋骨ニ適合スル様心得ユベ
シ
各自稟クル所ノ性質及ビ筋骨ニ逆ラハザル
ヲ第一トス乃チ引手ヲ眞直ニ延バシタルヲ
其儘ニツニ折ル可シ是レ即チ其體格ニ適合
スルノ度ナリ

第九條

引手臂下ル癖ノ矯正法

引手ノ臂下ル癖ヲ生スルトキハ左右折合ヒ
次第ニ締マルニ從ヒ癖下ルトキハ引手ハ延

ブユトナクシテ反テ縮ムモノナレバ之ヲ矯
正スルニハ第一ニ右ノ足ヲ後口へ踏ミ右ノ
腰ニ力ヲ入レテ引渡シ左右折合ヒタル上へ
胸ヲ割り込ム様カ又ハ左右ノ肩胛骨ヲ合ス
ル様心得ユ可シ左スルトキハ自ラ之ヲ矯正
スルコトヲ得ベシ

第十條

引手臂上ル癖ヲ矯正スル法

人ニ依リテハ引手ノ臂差上リ爲メニ充分引
ク事能ハザルコトアリ斯ノ如キトキハ右ノ
足ヲ定則ヨリ少シク前へ踏ミ左腰ニ力ヲ入

レ打テ起レタル際、臂ニ充分重キ物ヲ括リ付
ケタル心持ニテ耳ノ上ヨリ廣大ニ引キ引手
ノ肩上ニ腕首ヲ乗セタルガ如ク直スベシ左
スルトキハ自然ニ矢數ヲ懸ケルニ從ヒ臂下
ルモノナリ

注意

臂上ル事モ無ク下ル事モ無ク成ルベク後
へ引廻スヲ宜トス

第十一條

引手延ビ

引手延ビ引手ハ押手ト違ヒ前ニ述ベタルガ

如ク眞直ニ延バンタルヲ二ツニ折リタルモ
ノナルニ依リ定理上縮メタル丈ケ心ニ延テ
取ル様注意ス可シ
譬ヘバ射場ノ間數十一間ナリトセバ引手ノ
方ニモ十一間ノ無形場ヲ心中ニ假設シ押手
引手兩方兩的ノ中間ニ立テ射ルト假想シ既
ニ左右折合ヒタルトキ引手ノ方ノ的ヘ引手
ノ臂ノ届ク心持ニテ放ツ可シ

第十二條

引手ノカラ入レ所

引手カラノ入レ所ハ甚ダ大切ナルモノニテ

假令バ引手腕首、前膊骨、尺骨突起ノ處ヨリ臂
先キ迄線ヲ畫キ其線ノ上端ヨリ臂先キハ充
分カラヲ入レ腕首ヨリ先キハ餘リカラノ入
ラザル様心得ユ可シ如何トナレバ手先キヘ
カラノ入ル時ハ放レ荒ラクナリ中リニ害ア
ルモノナリ

第十三條

押手引手ノカラヲ平均ナラシム

ル法

左右ノカラ平均ナラシムル法ハ押手拇指ノ
根ヲ以テ弓ヲ向フヘ押シ捻ジルカラト引手

腕首ノ下タ乃ナ前膊骨ノ下タヨリ臂先キ迄
ノカラトテ平均セシメ而シテ押手引手共貫
キヲ通シタルガ如ク丈夫ナラシム可シ古人
謂ヘルトアリ前手ハ大山ヲ押ス如ク後手ハ
虎尾ヲ握ルガ如シト此語玩味シテ鍛鍊ス可
シ

第十四條

引手撮ミ

引手撮ミハ中指ト無名指トノ中央關節部ニ
拇指ノ頭ヲ當テル如クシ而シテ指命指ニハ
カラテ入ル可ラズ指命指ニカラノ入ルトキ

ハ臂ノカラ又從テ薄弱トナルヲ以テ自然ト
放レ荒ラクナルナリ
最初撮ミ所ハ弦ノ筈留メノ所ヨリ凡一二寸
下タノ處ニテ撮ミ次第ニ捧ゲ矢ノ螻蟻半分
ヲ撮ミノ上ニ出シ其半分ヲ撮ミ込ム可シ餘
リ螻蟻ヲ深ク撮ミ込ム時ハ左右折合ヒ放ッ
ニ當リ矢枕ヲ落ナ且ツ折合ヒ〔押手引手〕タル上
後面ヨリ矢通りヲ見ルトキ矢ノ筈、曲線狀ヲ
爲スコトアリ如斯射手ハ矢ノ出荒ラクナル
ヲ以テ從ツテ中リニ害アリ故ニ矢ノ筈ニ無
理ナク押手引手ヨリ互ニ矢ヲ助ケ而シテ矢

ノ素直ニ出ヅル様心得ヘシ

第十五條

左右肩根並肩心持

押手ノ方ハ肩根ヲ少シク落シ引手ハ肩根ヲ少シク高ク前へ張出シ左右共折合ヒタル上へ肩根ノカヲノ拔ケザル様注意ス可シ

第十六條

腰ノ詰メ

腰ノ詰メトハ弓書ニハ腰ヲ右ニ入レ左ニ詰ムルトアレ共是レニテハ只ダ腰ノ捻リノミヲ云フ者ニシテ我が學ビシハ此ト異ナリ腰

ヲ張り詰ムル者ニテ其内尤モ拔ケ易キハ左腰ナレバ少シク左リへ詰ムル心持ヲ爲ス可シ前、胴作りノ條ニ説ク如ク臍下ニ氣ヲ充滿セシメ而シテ上氣ヲ防グ爲メ之レヲ教ヘタルモノナリ

第十七條

骨合ヒ筋道

骨合ヒ筋道トハ先ヅ自己ノ骨格ヲ能ク査定レテ其筋道スナハチヲ正スヲ第一トス夫ヨリ各自ノ骨格、筋道ノ組織如何ヲ検査シ其人々ノ天賦ノ得生ヲ會得シ能々注意鍛鍊ス可レ體格、得性

ノ如何ヲ願ミズシテ修行スルトキハ決路ニ
至リ其蘊奧ヲ得ルコト難シ

第十八條

矢束

矢束トハ引込ミノ度ヲ謂フモノニテ寸法ハ
矢ノ螻蟻ノ處ヲ自己ノ左耳ニ當テ左手ヲ伸
バシテ矢ノ根ノ處ヲ其儘左手ニテ握リタル
ヲ定寸トス

第十九條

放レ

放レ又ハ決路トモ云フノ教ハ種々アレドモ今之レヲ約

言スレバ左右押手折合ヒタル上へ拇指ノ頭
ヲ以テ引手ノ肩ヲ彈クガ如ク放ツモノナリ
然レモ是レ全ク一語總括ノ教ヘニシテ直々
ニ以テ應用ス可ラズ
放レト云フハ今放ツト云フ意氣アリテハ宜
カラズ前ニ謂フ處ノ如ク押手引手ハ勿論左
右及ビ腰、胸、膝下へ充分カラナ入レ前條ニ示
ス所ノ如ク一ツトシテカラノ至ラザル處無
キ様張合ヒ心氣術一致シタルトキ臍下ノ力
ヲ以テ切ル可シ如斯心得日々修鍊スル時
ハ遂ニ不知不識及ビ引手自他手自然ニ放ツコト得ル

ニ至ルモノナリ

世人或ハ永ク保テテ後テ放ツテ宜トスルト
カ又ハ早ク切ルヲ中リニ適スルトカ論スル
者アルモ之レ全ク皮想ノ見解ニシテ決シテ
眞味ヲ穿テタル論ニアラズ即チ前ニ述ブル
ガ如ク今切ルト謂フ念慮ヲ捨テ而シテ惣心
ノカラ一トシテ入ラザル處ナク我ガ惣心悉
ク忍トナリ既ニ骨筋ノカラ充滿レ心技共ニ
延ビタル際自然ニ放ツ可シ是ヲ以テ惣心ノ
カラ早ク滿ツル時ハ早ク放テ遲ク滿ツル時
ハ遲ク切ルベシ故ニ調子ノ緩急ハ決レテ論

ス可キトニ非ズ惣心ノカラ充滿シ從テ心氣
術一致シタル時ヲ以テ適度トス
放ツ場合ニ至リ射形ヲ虚飾シ或ハ的中ノ念
慮ヲ起ス可カラズ唯ダ的ニ向フテハ矢度ノ
敵ヲ引受ケ卷藁ニ向フテハ刀鎗ニ對シテ勝
敗ヲ決スルト心得ヘ一矢タリトモ徒ラニ放
ツトナク乃チ自己ノ學ビ得タル處ヲ勤メ精
心ヲ盡シ放ツヨリ外ナシ若シ射損ズルトキ
ハ忽チ敵ノ擒ト成ルハ必然ナレバ目前受敵
ノ氣ヲ以テ一矢ダモ大事ノ矢ト心得鍛鍊ス
ベキ者トス

當時射ヲ弄ブ者射而能ク中タルトキハ心氣
自ラ快愜ヲ覺ヘ外ル、トキハ隨氣怠心ヲ生
ズ此レ全ク一時ノ謬意ノミ當今兵制一變セ
シニヨリ武射ハ心要無キヲ以テ縷々贅說ス
ルニ及バザレドモ以上ノ心得ニテ修鍊セザ
レバ永ク中リヲ保ツテ能ハズ間々我流ニテ
モ初メハ能ク中ルヲアレドモ段々矢數ヲ積
ムニ從ヒ自然ト中リ減シ其際ニ至レバ忽ナ
疑心ヲ生シ或ハ押手ノ惡キカ又ハ引込多キ
カト種々ノ雜念ヲ起シ遂ニ迷頓シテ快ク射
ルヲ能ハザルニ至ルモノナルヲ以テ平素宜

シク良師ニ就キ學バザレバ決シテ射ノ蘊奧
ヲ得知スルヲ能ハザルモノナリ
茲ニ稻穗ノ分レト謂フヲアリ早朝稻穗ヲ觀
ルニ穗先ノ露次第ニ流ル、ニ從ヒ稻穗ハ撓
ミ穗先ノ絶頂ニ至ルト露ハ自然ト地ニ落テ
撓ミタル稻穗ハ又本ニ復スト是レ先師ガ放
レ教授ノ譬諭トシテ引用シタルモノニテ此
教ヲ最モ宜トス其他種々教ヘアレドモ此語
ニ勝ル教ナキヲ以テ爰ニ摘載スルニ依リ初
學ノ徒ハ宜シク玩味スベシ然レドモ若シ此
語ニシテ誤解スルトキハ放レト云フハ或ハ

和ヲカナル者ノ如クナレドモ決シテ然ル可
キ者ニ非ス極言スレバ則チ強ノ極度ヲ指ス
モノニテ乃チ稻ノ穂先キヘ露溜リ稻穂ハ撓
ミ露ハ自然ニ地ニ落ルガ如キ形状ヲ指シタ
ルモノナリ
前數條ノ説明ニ則トリ鍛鍊スル時ハ遂ニ此
ノ技ノ蘊奧ヲ得ルヲ疑ヒナシ此語ハ最モ注
意スベキモノニシテ初心ノ人直チニ用ユル
ハ或ハ誤解シテ反テ上達ノ害ト成ル事アル
ヲ以テ矢數ノ功ヲ積ミ〔其師ニ就キ凡ソ矢數
十萬筋モ射ルベシ〕假成ニ
射形モ能ク成リ射道モ辨ヘタル上ニテ用ユ

可シ

此ノ放レノ技ハ射藝ノ秘訣ニシテ庸愚ノ
者輕クシク啄ヲ容ル可ヲザル者ナレモ只
ダ數年間學ビ得タル大要ヲ記載スルモノ
ナレバ先學ノ諸師ハ高論有ラシコトヲ希
望ス

注意

本條ニ於テ尤モ注意スベキハ速ニ其技ノ
上達ヲノミ希ヒ文義ヲ誤解シ臆測妄想ヲ
起シテ不必ノ力ヲ入レ不用ノ腹力ヲ用
ルキハ反テ射藝上ニ一ノ凝癖ヲ生シ射技

ノ目的ヲ誤マルモノニ付宜シク注意スベ
キモノトス

第二十條

息合

息合ハ弓構ヘシ打テ起シタル時ヨリ早ク息
ヲ詰ムル可カラズ如何トナレバ早ク息ヲ詰
ムルトキハ放射ノ場合ニ至リ若詰ヲ覺ヘ發
矢爲ニ死物ト成ルモノナレバ宜シク左右引
分ケタル時分ヨリ呼吸ヲ詰メ充分胸膈ノ間
ニ餘裕ヲ存シ而シテ後テ放ツ可シ放ツトキ
呼吸迫ラザレバ悉ク活氣ヲ生ズルモノナリ

又引渡シ放ツトキ呼吸スルキハ愒心ニカラ
ノ配合薄弱ナルヲ以テ放レ鋭カラズ尤モ競
射ノ所ニテ中リテ争フ時「ビク」出ズルカ又ハ
左右不折合ナルト間々有ルモノナレバ其時
ハ引渡レタル儘一呼シ更ニ左右折合セ二ノ
息ヲ以テ放ツ可シ左スレバ呼吸ニ餘裕ヲ存
シ發射ニ過ナナカル可シ

第二十一條

氣合

氣合ヒ是レ前條ニ述ベタル放レノ條ト相對
シテ弓術中最モ大切ナル秘訣ナリ少シク射

ノ形容備リタル後ナハ心氣ノ衛養ヲ第一ト
ス先ツ弓構ヘシテ打テ起ス際、弓ノ末彌ヲ以
テ天ヲ突ク如クシ心氣逆上ヲ止メ的ヲ臍下
ニ引付ケ氣ハ恰モ戰場ニ在リテ敵ニ向フガ
如ク心氣變動セズ毫末ノ欲心ナクシテ心氣
術一致シタルトキ放ツ可シ一矢ヲ放テ直テ
ニ二矢ヲ繼グニ當リ意氣必迫セザル様注意
スベシ假令バ第一矢ヲ放テントスルキハ固
ヨリ充分ノ意氣ヲ用フベシト雖モ其矢ヲ放
ツ場合ニ至リテハ充分ノ内幾分ノ餘裕ヲ存
シ置クベシ若シ意氣ニ餘裕ナク心氣相迫ル

トキハ發矢悉ク死涸シテ堅キモ通ラズ遠キ
モ往カズ又從テ中リモ悪キモノナレバ宜シ
ク注意シ鍛鍊スベシ而シテ矢ハ必ズ我カ精
心ノ向フ處ニ往ク者ナレバ宜シク心氣術一
致シ自己ノ精神ヲ潔白ナラシメテ發射スベ
シ〔射ヲ學ブ宜シク無
欲淡白ナルベシ〕

注意

- 第一 大的ヲ射ルトキノ心得ハ的ノ鐘目コノナカヲ的ト心得是レニ對シテ射ル可シ
- 第二 小的ヲ射ル時ハ的ノ外、心中ニ凡一尺計リノ無形的ヲ畫キ其的ニ對シテ射

ル可シ然ルトキハ的ヨリ氣ヲ奪ハル、
コトナク技モ又畏縮セズシテ大ニ技術
ノ發達ヲ進ムルモノナリ

第三 性急ナル人ハ永ク保ツテ能ハザル
モノナレバ平素宜シク注意シテ心氣術
ヲ一致ナラシム可シ

第四 性緩ナル人ハ動モスレバ永ク保テ
テ放ツノ度ヲ失スルヲ往々アルヲ以テ
是レ亦々平素其心得ニテ注意ス可シ

第二十二條

初學ノ人稽古心得

初學ノ人ハ凡ソ一ケ年計リハ決レテ的ヲ射
ル可ラズ卷藁ニテ矢數ヲ重テ初メ足踏ヨリ
胴作リト次第ニ順序ヲ逐ヒ練習スル時ハ射
形備ルヲ以テ然ル後テ的ヲ射ル可シ最初ヨ
リ的ヲ射ルトキハ的の中ノ欲心增長シ爲メニ
射形備ラズ真正射術ノ發達ヲ妨グル者ナリ
平素練習ノ際ハ一矢タリトモ決シテ徒ラニ
放ツ可ラズ假令ヒ一矢ヲ放ツト雖モ大事ノ
矢ト心得鍛鍊ス可シ法則ヲ守ラズニテ徒ラ
ニ百發千射スルトモ反テ射形ヲ崩シ上達ノ
害トナルモノナリ先師謂ヘルヲ一矢ノ

誤リハ萬箭ノ損ト金訓守ル可シ

第二十三條

卷藁稽古心得

卷藁ハ射形矯正ノ法ナレバ初學ノ者ハ之レニ則トリ居動止靜ヲ正シ射道法則ヲ會得シタル後ナ射ル可シ蓋シ百發百中ノ基礎此法ヨリ出ツ

假令ハ今茲ニ人アリ大劔ヲ帶ビ長鎗ヲ提ゲ我ニ戰ヲ挑ム吾弓矢ヲ採テ之レニ向フ今放ツ所ノ一矢ハ吾ヲ殺シ吾ヲ生カス者ナリ卷藁ヲ射ル宜シク此心ヲ以テスベシ然ル時ハ

死物ノ的安ゾ中ヲザルノ理アラシヤ

第二十四條

的稽古心得

的ハ前ニ述ブルガ如ク矢度ニ敵ヲ引受タル心持ニテ的中ノ欲念ヲ去リ正規ニ則トリ己ヲ正クシテ放ツトキハ必ズ的中スル者ナリ人多クハ自己ノ射形ヲ飾リの中ノ欲心ヲ生ズルヲ以テ射ノ本體ヲ失シ發矢皆死涸シテ生氣ナシ時或ハ的中スルモ是レ遇中ニシテ賞スベキモノニアラズ古人謂ヘルトアリ射ハ君子ニ似タル有リ正鵠ニ失スレバ返而諸

ヲ其身ニ求ムト此語誠ニ然リ

注意

平素的ヲ射ルトキハ的一尺二寸若クハ八寸迄〔射場ノ間數弓間〕ヲ適度トス小的ヲ射ルトキハ唯ダ欲心ヲ養生スルノミニテ其益ナク反テ射形ニ害アルニ依リ決シテ射ル可ラズ

第二十五條

弓強弱

弓ハ強キニ利アリ弱キハ損多キモノトスルモ初學ノ人ハ弱弓ヲ以テ練習シ而シテ前條

ニ述ベタル處ヲ會得スレバ如何ナル柔弱ナル性質ニテモ遂ニ強弓ヲ用ヒラル、ニ依リ決シテ最初ヨリ強弓ヲ用ユ可ラズ始メヨリ強弓ヲ用ユル時ハ技ニ縮ミ出ヅルノミナラズ種々ノ癖出ルヲ以テ宜シク注意ス可シ弓ハ弦口ヲ強クシテ肩ニ折合タルトキ柔クカナル様覺ユルヲ以テ宜トス弦口ヲ弱ク底アル弓ハ矢追ヒ悪キノミナラズ堅キヲ貫キ遠矢ヲ射ルニ適セズ弦ハ細キヲ用ユ可シ太キハ損多ク且ツ射調子悪シク又從テ矢追ヒ悪シクナル者ナリ

第二十六條

矢

矢ハ外ニ子細ナキモ強弓ニハ細キ矢ハ宜シ
カラズ又弱弓ニ太キ矢モ惡シ宜シク弓ノ強
弱ニ依リ見計ヒ用ユベシ

第二十七條

鞞

鞞ハ初學ノ人ハ帽子柔カナルヲ用ヒ射ノ體
形少シク備リタル上ハ帽子上皮堅メテ〔上皮堅
メトハ
皮ヲ以テ至極堅ク拵ヘタルナリ〕用ユ可シ帽子柔カナレ
今ノ角入ノ機堅キヲ云フナリ
バ放レ惡ク強弓ヲ射ルトキ遂ニ拇指ニ痛ミ

ヲ生ジ矢數ヲ重子射ルヲ能ハザルニ至ルモ
ノナリ

鞞懸ケ口ナ初學ノ中ハ成ルベク淺ク撮カミ次
第二功ヲ積ムニ從ヒ深ク撮ムヲ宜トス而レ
テ懸ケ口ナ流レザル様一文字ニ懸ク可レ
但拇指ノ裏面ニ斜メニ懸ケルヲ流ル、ト
云ヒ垂直ニ懸クルヲ一文字ト云フ

第二十八條

禮射

- 一 獨弓ノ體配ノ事
- 一 藝目鳴弦ノ事

- 一 墓目ノ事
- 一 誕生ノ墓目ノ事
- 一 産屋ノ墓目ノ事
- 一 難産ノ墓目ノ事
- 一 産後ノ墓目ノ事
- 一 狐落シ墓目ノ事
- 一 狐射殺ノ墓目ノ事
- 一 結願ノ墓目ノ事
- 一 射初メノ事
- 一 大的ノ事
- 一 同別傳ノ事

- 一 同略式ノ事
- 一 的山開キノ事
- 一 神納金的ノ事
- 一 卷藁ノ事
- 一 同射様ノ事
- 一 同別式ノ事
- 一 同跪居ノ事
- 一 矢代セリ矢ノ事
- 一 組合ノ勝負ノ事
- 一 厂的ノ事
- 一 草鹿ノ事

一圓物ノ事

一八ツ的ノ事

一小串的ノ事

一挾ミ物ノ事

一跪居ノ事

一立射禮ノ事

一二人弓ノ體配ノ事

右禮射ニ屬セシ概略

第二十九條

武射

一具足弓射様ノ事

一堅物通シ様ノ事

一同矢ノ事

一武者射込矢ノ事

一防矢ノ事

一差矢ノ事

一軍弓拵へ様ノ事

一陣矢拵へ様ノ事

一軍陣へ用ユ可キ標ノ事

一籠ノ事

一同撮ミ緒フ事

一同一本撮ミノ事 口傳

- 一 箆負ヒ射様ノ事
- 一 繁^シ合ノ事
- 一 林合^{ハヤシ}ノ事
- 一 軍陣弦打^ナノ事
- 一 鎗脇太刀脇ノ事
- 一 矢挾間射様ノ事
- 一 同三人ニテ射様ノ事
- 一 幾人ニテモ射様ノ事
- 一 矢倉ニテ弓射様ノ事
- 一 上へ低キ所ニテ射様ノ事
- 一 早矢審ヒノ事

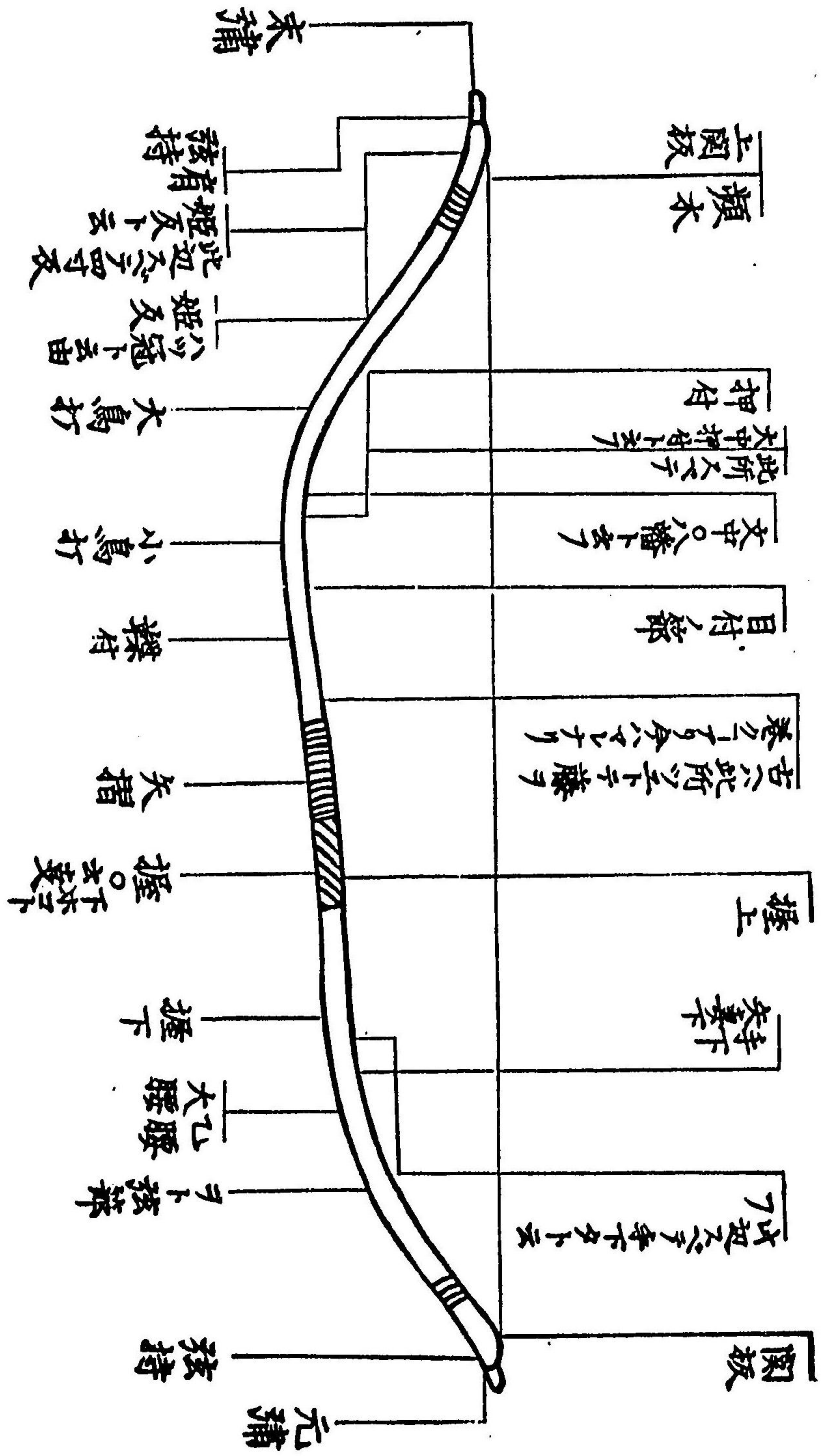
- 一 馬上ニテ弓射様ノ事
- 一 弓手違ヒ妻手違ヒノ事
- 一 走ル者射様ノ事
- 一 弓ヲ鎗ニ用ユル事
- 一 雨中弓射様ノ事
- 一 厂股射様ノ事
- 一 矢聲ノ事

右武射概略

右禮射武射共當今ニ必要ナキヲ以テ粗其概略ヲ舉グ餘ハ後編ヲ待テ出版スベシ

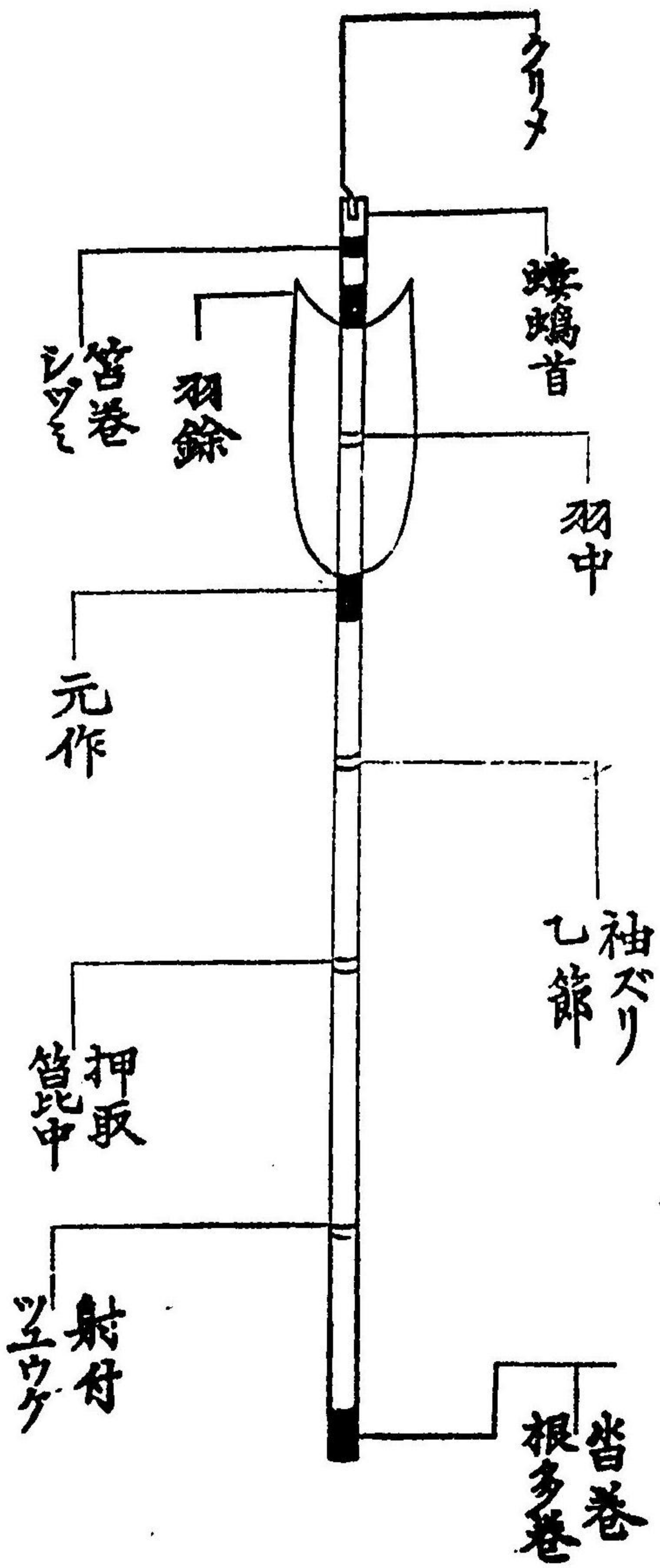
第三十條

弓ノ名稱



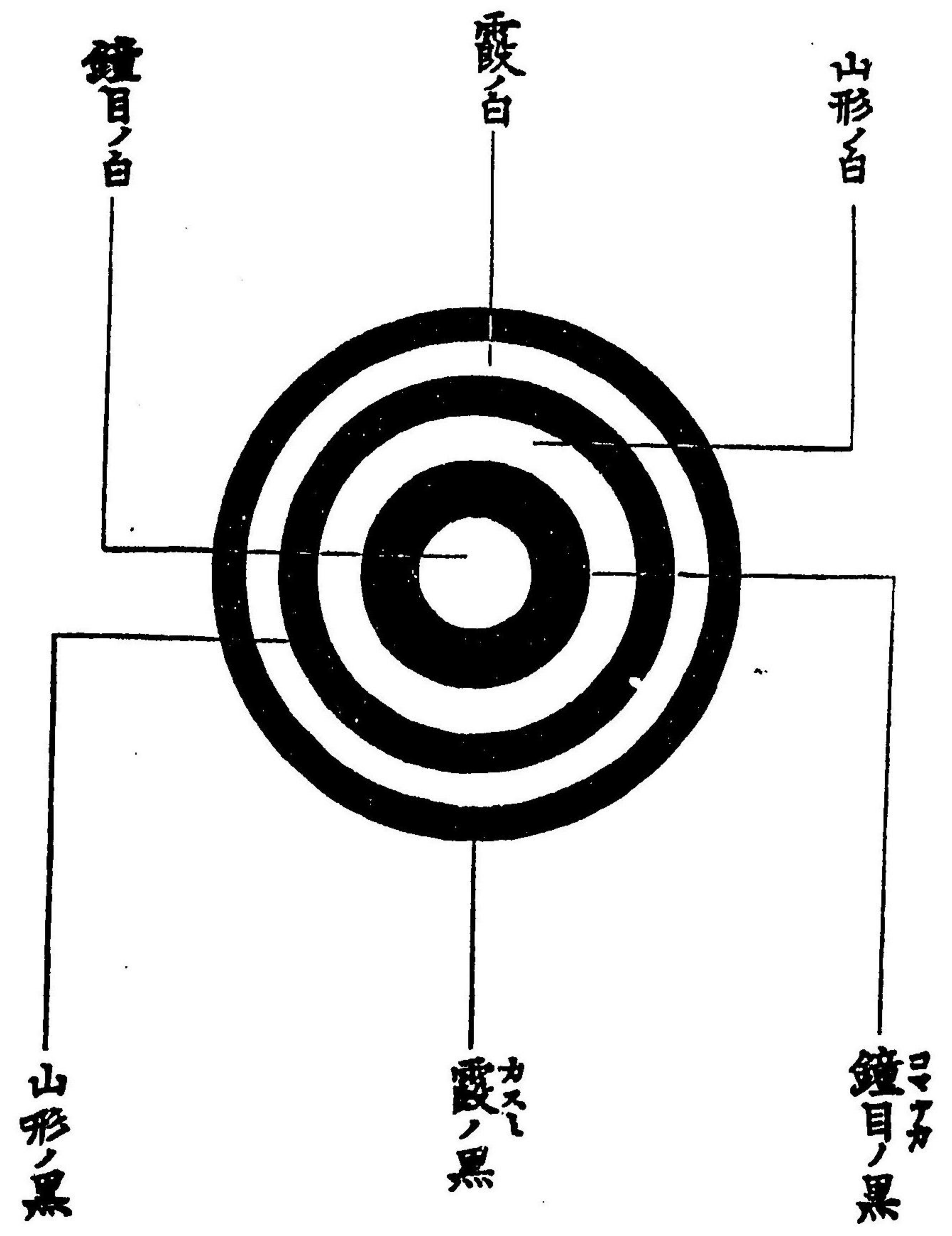
第三十一條

矢ノ名稱



第三十二條

的ノ名稱



右弓、矢、的、トモ種々アレ共各其一ヲ舉ゲ餘ハ
是ヲ略ス

明治二十六年五月二十八日印刷

明治二十六年五月三十一日出版

著作兼發行者

乾 健 一

郎



長崎縣對馬國下縣那波原日吉町百拾七番月
當時長崎縣長崎市出來大工町八拾番月寄留

長崎縣肥前國長崎市今鍛冶屋町
三十三番月取紙會

印刷者

淺 田 次 郎

